談話室

久しぶりにヨーロッパを訪ねて

この夏４年ぶりにヨーロッパを訪ねた。前回は農泊の現場を訪ねイタリア各地を回ったが、今回はスイス、オーストリアの木材利用、森林林業の視察に、中東欧で最大の国際農業・食品の見本市「AGRA 2022」に政府代表として参加するというミッションが加わりスロベニアまで足を伸ばした。流行以来２年半を経過したコロナと今年２月のウクライナ侵攻に端を発した経済危機に当地の人々がどう対処しているのかも大きな関心事項だった。

８月中旬羽田を立った飛行機はシベリアを避け北極海からノルウエー沖、デンマーク上空を通過し２時間余計にかけてミュンヘン空港に着いた。ここから第一の目的地チューリッヒに向かった。航空機の中でのマスク着用は呼びかけられており、搭乗時にマスク着用していない乗客にキャビンアテンダントがマスクを配っていた。しかし空港を出ると景色が一変し我々以外ほとんど誰もマスクをしていないのである。当地ではコロナに罹患しても症状が軽ければマスクを着用すれば外出が認められるようになっており、マスク着用がイコールコロナ罹患者と見られかねないこともあったのかもしれない。その後我々も常に携行はしたが、よほど密な状況以外マスクフリーで過ごさせてもらった。一方国民の生活を見ると、諸物価は日本に比較して高水準でそこからさらに上昇するといった状況であった。昼の軽食がワンコインなどではとても無理で４倍から５倍は覚悟しなければならなかった。オーストリアで耳にしたが、エネルギーについては倍以上の値上がりが予定されており政府からの給付金が出ても年金生活者等がこの冬を越せるだろうかが真剣に心配されているとのことだ。代替熱源としての薪の確保に皆必死だとも聞いた。

さて、出張のミッションの前半は木材利用と森林林業の視察だった。チューリッヒではIT企業の本社ビル(７階建)が金具を用いない木構造で建てられていた。エントランスを入ると木の列柱が大きな空間を支える見事なデザインで、誇らしいことに設計者は日本人であった。日本の建築法規(耐火性能)には適合していないとのことだが、木肌を表して使うことで木の良さを実感することができた。次に有名なチューリッヒ動物園の象舎を見学した。高さ18メートル、直径80メートル程のドームを伏せた形の大空間をCLTの木造部材が支えている。

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/

土台はコンクリートかと思ったら巨大な集成材の塊であった。リヒテンシュタインのスキーリゾートであるマルブンで見た内部の構造から外壁まで全て木造の建物群も見事であった。経年で徐々に色変わりする木肌が周囲の景観に溶け込んでいた。日本人ほど木使いが巧みな国民はいないと思い込んでいたが、欧州に学ぶことがまた一つ増えた気がした。林業ではオーストリアの古都グラーツ近郊でタワーヤーダを駆使した木材の搬出をみせてもらった。標高1000メートルを超える現場までタワーヤーダを搭載した大型トラックが入ることのできる林道が整備されていたが、そこから林内には500メートル先までワイヤーを張って集材するのである。基幹的な林道さえあれば林内に作業路網を細かく張り巡らすことがいらないわけである。また、現場で玉切りしてトラックに積み込んだら林道沿いに一旦ストックせず工場に直送しており、横持ち経費の節減を実現していた。天然更新と植樹の混合のさせ方もタワーヤーダ集材ならではのものが見られた。日本の森林林業の再生のお手本がドイツ、オーストリアの林業なのだが、まだまだ学ぶべきところがあるなあというのが実感である。来年にでも日本の森林林業関係者と一緒に彼の地を再訪しさらに深く見聞したいものである。

最後のミッションがスロベニアのオーストリア国境近くのゴルニャ・ラドゴナで開催された国際農業・食品見本市「AGRA2022」への出席である。本年は日本とスロベニアの国交樹立30周年にあたることに加え、農林水産省の農林水産審議官だった松島大使からの要請もあり、日本は中東欧への日本食・食文化の発信、農林水産物の輸出促進等を目指してこの見本市にパートナー国として参加したわけである。開会式ではスロベニアのパホル大統領がウクライナ危機を受けた食料安全保障政策を自らの言葉で語り、シンコ農林業・食料大臣がバイ会談の中で食料自給へ向けた決意を述べるなど農林水産政策が国家統治の基にしっかりと位置付けられていると感じた。また会場は周辺の国々からの人々を含め多くの来場者で大変賑わっていたが、農や食と国民の距離が非常に近いことに羨ましさを覚えた。日本でもこのような見本市をできないものかと思いつつ帰国した。

（(株)農林中金総合研究所 理事長　皆川芳嗣・みながわ よしつぐ）

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/